

# KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 84 号 平成 28 年 11 月 20 日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



昭和初期、小野浜駅（後の神戸港駅）でのバナナの貨車積み作業（株式会社上組 提供）

## バナナと神戸

商品としてバナナが、日本に初めて入ってきたのが神戸でした。明治三十六年、台湾・基隆港から七つの竹籠に詰められ、神戸港に到着しました。大正十三年に台湾青果株式会社が設立され、輸入が拡大していきますが、まだまだ庶民には、お土産や病気の時にしか食べられない特別な食べ物でした。そして太平洋戦争が始まり、バナナは姿を消します。

事情が一変するのは昭和三十八年。バナナ輸入自由化により、輸入量が増大します。昭和四十年には、自由化前からバナナが多く陸揚げされ「バナナ埠頭」と呼ばれていた兵庫埠頭が整備され、バナナ専用上屋・一大バナナセンターが完成します。最初の輸入から一〇余年、神戸港は、今も全国一のバナナの輸入量を誇っています。

獅子文六の小説『バナナ』は神戸を舞台に輸入自由化前のバナナ卸売業を題材にしています。文六は後のエッセイで「バナナとはオカシなものだと思って、（この）小説を書く気になった」とバナナの愛嬌と滑稽味を語っています。ユーモラスで美味なバナナ。自由に食べることができ、時代が続くことを願います。

**農す神戸—NORTH KOBE COMMUNITY TRAVEL GUIDE**編集委員会編（英治出版）

里山と都市が隣接する神戸市北区。豊かな自然に囲まれ、都市部へのアクセスもよいこの場所で、両方を行き来しながら、自分たちようどいい暮らしをつくっている人たち十三組を紹介している。

北区の基本情報だけでなく、就農に関わる窓口やアドバイスも掲載しており、もっと「農」を感じながら暮らしたい人に、新しい暮らしを提案している。

**つながるカフェーコミュニティのへ場をつくる方法** 山納洋（学芸出版社）

本書は、人と人がつながる場には何が必要かをテーマに、著者自身が手掛けたり、訪ねた事例を数多く紹介している。

神戸では、灘区の地縁団体を中心とした摩耶山活性化のための取り組みや、長年にわたって子供たちに「ねーちゃん」と慕われる女性店主が核になり地域に欠かせない場となっている兵庫区の駄菓子屋が取り上げられる。場づくりの手がかりを与えてくれる一冊。



**花を巡る文学散歩—西 神出・檀花** 谷・玉津・伊川谷・岩岡 神戸市建設局公園部計画課編集・発行

神戸各区の花と緑を楽しみながら、名所旧跡や文学作品の舞台となった場所を散策できるよう、神戸市が作成したガイドマップ。本冊子の西区編で全九区が揃った。

区の花ナデシコの紹介とともに、『古今集』『山家集』にも詠まれた野中の清水、『源氏物語明石の巻』ゆかりの岡之屋形跡、『平家物語』の義経道など、古典に登場する西区の名所が取り上げられる。



**スポーツ都市戦略—2020年後を見すえたまちづくり** 原田宗彦（学芸出版社）

スポーツで地域を活性化しようとするオリンピックなどの巨大イベントのほか、小さな自治体が地域密着型のスポーツイベントを開催する例も増えている。

本書は、神戸市のユニバーシアード誘致など過去の事例を数多く紹介しながら、スポーツと都市の関わりを様々な角度からとらえて解説している。今後のスポーツ都市戦略の指針となる一冊。

**濃い味、うす味、街のあじ。** 江弘毅（140B）

情報誌「Meats Regional」の元編集長による京都・大阪・神戸のおいしいお店内。グルメサイトの評価点だけでは分からない、店と周辺の街の魅力を丸ごと紹介する。神戸で取り上げられたのは、居酒屋、フランス料理店、洋食屋、バー、おでん屋とバラエティに富んでいる。街の歴史やちよつとした蘊蓄（うんくく）を読みつつ、料理や店の様子が描かれたイラストを眺めているだけで、店に行った気分になれる。

**須磨の歴史と文化展—受け継がれる記憶** 神戸市立博物館編集・発行

「須磨」は、神戸の中でも昔から人に知られた場所だった。平安の昔から和歌に詠まれ、『源氏物語』の舞台の一つとなり、源平合戦の激戦地としても有名である。自然に恵まれ、温暖な気候は人の生活に適し、近代には富裕層や外国人がこの地に別荘を設けた。

平成二十八年二月から三月に神戸市立博物館で開催された特別展では、付近で出土した古代の人々の生活用具や、須磨の社寺に伝えられた仏像・仏画などが展示された。近代の須磨を写した写真や地図からは、少し前の須磨の姿が浮かび上がる。

「須磨」の魅力を再発見できる図録である。



食から学ぶ震災の記録―次世代につなげたい、防災の知恵・食の知恵。白井操企画・編集（笑顔の食卓）

編者と阪神・淡路大震災体験者との対話を元にかかれた一書。被災者へ食を届けようという心、しっかり食べて健康を維持してもらうこと、トイレを清潔に保つ努力、震災時にそれぞれができる限りの行動を尽くした記憶が語られている。これらの体験を活かし、災害に備えるためにも、語り継ぐことの大切さを訴えかけている。

神戸ネコ物語 摘今日子（西田書店）

猫の目を通して描いた小説が三篇。「名はテツ」は生まれて三週間に阪神・淡路大震災に遭遇した純血種のロシアンブルーが主人公。子猫は、新しい飼い主との暮らしの中で伸び伸びと成長してゆく。第二話は元町高架下で生まれたた野良猫、第三話は長田を舞台に「野良のボス」の生き様を描く。猫と人の関係からは、人々の暮らし、地域の様子なども浮かび上がる。猫の行動、そのしぐさや思考、描写など著者の猫への思いが伝わってくる作品。

隣の隣は隣―神戸わが街 安水稔和（編集工房ノア）

一九九六年の刊行から数えて五冊目の詩文集。合わせて総頁数二千六百余となる五冊は著者にとつて「いつでも取り出せる震災戦災の記録と記憶の収納庫」（「あとがき」より）だと言う。

「阪神淡路大震災と文学 十年目のインタビュー」「いのちの記憶」（詩）「やっとわかりかけてきたこと」（講演）など。震災後十年目から二十一年目までに発表された震災に関わる詩・散文・講演・インタビューなどを収録。「焼け跡に残る階段」ほかカバーを含む使用写真は全て、著者と家族が撮影したもの。巻末に初出一覧付。



II その他の新刊 II

所蔵資料図録―暮らしのなかの震災資料 阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター資料室企画・発行

神戸・六甲山の草花ハンドブック 夏々秋編 清水孝之撮影・著（ほおずき書籍）  
豪商たちがつくった幕末・維新 福田智弘（彩図社）

神戸 その⑧ あんな人こんな人

河本 春男 かわもと・はるお

明治43年(1910年) ~ 平成16年(2004年)

愛知県生まれの河本春男は、地元中学校、東京高等師範学校でサッカー一筋の青春時代を送りました。昭和7年、神戸一中に体育教師として着任すると、在籍した7年間に数々の大会で蹴球部を優勝に導き、神戸一中サッカーの黄金期を築きます。この様子は氏がまとめた『神戸一中蹴球史』からも、うかがい知ることができます。神戸賀川サッカー文庫の寄託者である賀川浩氏もこの時期の教え子の一人です。

戦後は、教育者から実業家へ転身を遂げます。手探りの生活の中、昭和33年に有限会社アルプスバター神戸直売所を設立。その後、ドイツ洋菓子店ユーハイムのエリーゼ・ユーハイム社長に懇願され社の再建に力を尽くし、夫人亡き後は、社長としての職務を全うしました。

氏は、神戸と深い縁で結ばれていたのでしょうか。故郷から離れて、神戸を代表する「サッカー」と「洋菓子」、異なる二つの分野で功績を残しました。

著書：『人間その気になれば―ユーハイムの年輪』（玄同社 1981）、『神戸一中蹴球史 復刻版』（ユーハイム体育・スポーツ振興会 2011）  
参考：『ユーハイム物語』（ユーハイム 1964）





ランダム・ウォーク・

イン・コウベ ⑧4

### 近代洋服の発祥

幕末から明治期、港を世界に開いた日本には、外国のさまざまな文化が入り、人々の暮らしの様子は次第に変わっていきました。

目に見える変化は、人々の姿でした。男性はちょんまげを切り、洋服を着るようになりました。渡欧経験のある初代兵庫県知事の伊藤博文は率先して洋服を着用しました。その様子を『神戸市史』では、「人の珍とせし澤井フクリン・呉郎フクリン等にて仕立てし衣服を着用してより、此服装一時紳士間の流行物となり」とあります。また、同書に「藤田積中・神田兵右衛門等の明治二年既に率先洋服を着用して流行の魁をなし、県当局の依頼により市民勧誘の為め洋服着用のまゝ市中を逍遙し、且つ撮影せるあり」と、県民に洋服を奨励していた様子がうかがえます。しかし、このような西欧化を快く思わず、断髪した様子から伊藤博文のことを「坊主奉行」とあだなで呼ぶ人も多くいたようです。

神戸で最初に洋服を扱ったのは外国人でした。明治元年、山本通にドイツ人ブランドがブラオン商会、翌年、居留地16番館にイギリス人カベルがカベルデュー商会、30番館にスキップ夫妻がスキップ・ウオーズ&ハモンド商会を開業しました。やがて彼らの元で技術を学んだ日本人も開業しました。

しかし、洋服を着るのは官吏や軍人、政治家など一部の人たちで、一般人は洋服の知識が不十分で、珍妙な格好の人もいたようです。慶応三年の小冊子『西洋衣食住』（片山淳之助の名で福澤諭吉が著）に、「譬えば暑中に綿入れを着、襦はんの代わりに羽織を用いる等の間違いも少なからず」とあり、絵を用いシャツなどの名称や着衣方法を解説しています。



(右) 肌襦ハン オンドルシヨルツ  
(左) 下股引 ツローワルス

西洋衣食住 『福澤全集 第二巻』  
時事新報社 一八九八

政府は、明治四年に「散髪脱刀令」を出し、翌年に「洋服着用の太政官令」を出しました。この頃には洋服流行の兆しが見え、洋服屋も繁盛しましたが、需要の安定には至りませんでした。新しい港町に希望を抱いて各地から集まってきた仕立て職人たちの中には、足袋職人が多くみられました。直線裁ちの和服と違い、丸みを帯びた洋服の仕立てにはその技術が向いていたようです。仕立ての仕事がない時は、器用な手先を生かして椅子張りや外国人の乗馬用の馬のカバーなど、注文に応じて何でも縫ったそうです。

明治十年代、西南の役や内国勸業博覧会の開催などで全国の洋服業界は活気づきました。洋服業には、一つ物屋（個々の顧客の注文に応じる業者）と数物師（大口の注文を請け負う既製服業者）とがあり、神戸は大半が前者でした。明治十六年には日本人初のテーラーとも言われる柴田音吉が元町で開業しました。明治三十六年の第五回内国勸業博覧会に神戸から出品された柴田らの洋服は、いづれも優秀な賞を受賞し、神戸洋服の評判を高めました。

日本の西欧化が進む中、日本の文化や風習を愛する外国人たちも多くなりました。六甲開山で有名なグルームは、子どもたちに英語を学ばせず洋服も着せませんでした。ポルトガル領事を務めたモラエスは、西欧化により日本の素晴らしい文化が失われるのでは、と憂えました。

東遊園地にある碑「日本近代洋服発祥の地」は、洋服の身ごろと袖の型紙をかたどったユニークなデザインです。日本の洋服文化発展に、神戸洋服が大きな役割を果たしたとの自信と誇りを見ることが出来ます。



顕彰碑 日本近代洋服発祥の地

明治5年太政官令による洋服着用100年を記念して、昭和49年、神戸洋服商工業協同組合により東遊園地に建立

参考文献  
『神戸洋服百年史』『神戸市史第一集本編各説』『日本洋服沿革史』『日本洋服史』他